

# イザヤ書 11 章 1 節における「若枝」のマリアと「花」のキリスト

—古ラテン語訳聖書とウルガタ

井阪民子

西ヨーロッパでは中世以降、何世紀にもわたって、ウルガタと呼ばれるラテン語聖書が唯一の聖書として一般に使用されていた。これは4世紀末から5世紀初めにかけて、ヒエロニムス(345年頃—420年)が行った翻訳を土台としている。彼が最初に取り組んだのは、四福音書であったが、これはギリシア語原典からの新たな翻訳ではなく、古ラテン語訳聖書の改訳であった。384年にそれは完成した。その後390年頃、彼はヘブル語原典からの旧約聖書の翻訳を開始し、405年頃に完成させた。預言書(イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、十二小預言書)が訳出されたのは392、3年頃のようなものである<sup>(1)</sup>。ところで、実際にウルガタの本文をヘブル語原典と比較してみると、ヒエロニムスは必ずしも原典に忠実に翻訳していない。本稿で考察するイザヤ書11章1節も、その多数の箇所の一つである。この節の古ラテン語訳は七十人訳聖書の忠実な翻訳で、ヘブル語原典からかなり離れていた。だが、ウルガタでは古ラテン語訳がほぼそのまま保たれている。ヒエロニムスはその古ラテン語訳を温存した理由は、後述のように、「教会の伝統」のためと示唆されているものの、伝統の中身はこれまで示されてはこなかった。具体的にその伝統とはどのようなものなのか。最初期のギリシア教父以降の長い解釈の伝統に加え、ラテン教父のもとで独自に展開した解釈の新たな伝統を見ていながら、これを明らかに示すのが、本稿の目的である。

## 1. 古ラテン語訳の本文の保持

以下に示すのは、イザヤ11:1のウルガタ、古ラテン語訳、七十人訳聖書、ヘブル語原典の各本文とその邦訳である<sup>(2)</sup>。

ウルガタ et egredietur virga de radice Iesse et flos de radice eius ascendet<sup>(3)</sup>「そしてエッサイの根から若枝が出てくるであろう。そして彼の根から花が上に伸びるであろう」

古ラテン語訳 et exiet virga de radice Iesse et flos de radice eius ascendet<sup>(4)</sup>

七十人訳 Καὶ ἐξελεύσεται ῥάβδος ἐκ τῆς ῥίζης Ιεσσαί, καὶ ἄνθος ἐκ τῆς ῥίζης ἀναβήσεται.<sup>(5)</sup>「そしてエッサイの根から若枝が出てくるであろう。そしてその根から花が上に伸びるであろう」

ヘブル語聖書 w<sup>e</sup>yāsā' hōṭēr mīggēzā' yīšāy w<sup>e</sup>nēšēr mīššārāšaw yīfrēh<sup>(6)</sup>「エッサイの根株より一つの若芽が生え、彼の根から一つの若枝が出て実を結ぶ」(関根清三訳)<sup>(7)</sup>

イザヤ 11:1 は中世の教会のステンドグラスや写本の挿絵に見られる「エッサイの木」——横たわるエッサイの体から一本の木が生えており、それによってキリストの系譜が樹形で示され、梢にはマリアとイエス・キリストがいる——との関連でもよく知られている。

この節を Kedar は、ヒエロニムスがヘブル語聖書に基づいて翻訳する際、「おそらく教会の伝統の諸理由のために古ラテン語訳を元のままにしておいた」例の1つとして挙げるが、彼はこの節についてそれ以上一言も述べていない<sup>(8)</sup>。この節は最初期のギリシア教父以来、非常に重要な箇所として引用され、解釈され続けており、確かに教会の伝統にその理由があるであろう。とはいえ、教会の伝統は長い間に変化しながら蓄積したものであり、当然のことだが単純なものではなかった。実際にヒエロニムスが訳出の際に影響を受け、尊重した伝統とはどのようなものであったのか、具体的に示す必要があると思われる。そこで、先行する教父たちのイザヤ 11:1 に関する解釈、およびヒエロニムス自身の解釈を確認することによって、これを明らかにしたい。

まず、古ラテン語訳のままだというウルガタが、ヘブル語聖書の本文とどれほど異なっているのかを見ておく。両者を比べると、ウルガタはヘブル語聖書本文を正確に訳そうとしたものではないことはすぐ分かる。ウルガタでは節の前半と後半で同一の de radice「根から」が繰り返され、また「根」は単数形である。それに対

し、ヘブル語聖書では「から」にあたる前置詞は二度とも同じ語だが、節前半では *gēzā* 「幹」(単数形)、節後半では *sōrēs* 「根」の複数形が用いられている。また、ウルガタでは *flos* 「花」だが、ヘブル語聖書では *nēš̄r* 「芽、若枝」である。さらに、ウルガタで「上に伸びるであろう」と和訳した動詞は *ascendo* 「のぼる」であるが、ヘブル語聖書では *pārāh* 「実を結ぶ」という動詞である。

他方、ウルガタのこの箇所は正確には古ラテン語訳とまったく同じではなく、一つ異なる語がある。それは「出て来るだろう」を意味する動詞で、古ラテン語訳は *exiet*、ウルガタは *egredietur* である<sup>(9)</sup>。OLD の *exeo* と *egredior* の各項で最初に示される語義はどちらも「出て行く、出て来る」で、2語は同様の意味である。ヘブル語聖書本文で用いられている動詞 *yāšā'* も同様に「出て行く、出て来る」を意味する。だが、OLD によると、*exeo* には植物が「発芽する、成長する」の語義があるが、*egredior* には植物に関連する語義は見出されない。そこで、古ラテン語訳の *exiet* は適切な訳語であり、変更する必要がないように思われるのだが、実はここでの訳語の選択は、後期ラテン語の日常語における実態に即したものと考えられる。ウルガタでは *egredietur* という形は頻出するが(54回)、*exiet* はわずかである(5回)。それは、Löfstedt が述べているように後期ラテン語の日常語では、より多くの音節を含んで、それゆえ響きのより豊かな語の形のほうが、また、より意味の強い語のほうが好まれ、使用されるようになっていたからである<sup>(10)</sup>。

さて、この *egredietur* を除いてウルガタは古ラテン語訳と同一であるが、イザヤ 11:1 全体を通して古ラテン語訳は七十人訳の直訳である。そこで、ウルガタは間接的に七十人訳に従った訳であるとも言える。実際、上に挙げたウルガタとヘブル語聖書本文との相違は、すべて七十人訳に由来する。

教会にとってイザヤ 11:1 (あるいは 1-3a まで) は大変重要な箇所の 1 つであった。イザヤ 11:1 は待ち望まれたメシアを預言する言葉であるとユダヤ教徒は解していたが、キリスト教徒にとってそのメシアはイエス・キリストであることから、彼らはこの箇所をイエス・キリストについての預言とみなしてきた。最初期の教父であるユスティノス以来、ギリシア・ラテン教父の著作には頻繁にこの箇所の引用や言及が見出される。その際イザヤ 11:1 が全体として取り上げられ、イエス・キリストに関する預言と述べられることもしばしばだが、他方、この節の「若枝」と「花」という言葉に注目する教父も多い。

## 2. 教父たちの「若枝」と「花」の解釈

ギリシア教父のうち、ユスティノスはある箇所では、エッセイの根から生じる「若枝」をキリストであると述べ、別の箇所では「花」をキリストとみなす<sup>(11)</sup>。エイレナイオスとニュッサのグレゴリオスは「花」に言及し、これをキリストと述べる<sup>(12)</sup>。オリゲネスは「イザヤはキリストを若枝および花と呼んでいる」と述べるが、「若枝は罰せられる者たちに向けて、花は正しい者たちに向けて」とも述べ<sup>(13)</sup>、次のようにも記している。

「一方で、教えを受ける者たちが咎められるとき、彼らが叱責され懲罰を受けることを、救いをもたらすロゴスの若枝によって [イザヤは示し]、他方で、咎めと叱責の結果を花によって [イザヤは示す]」(『エゼキエル註解抜粋』7, 10)<sup>(14)</sup>

オリゲネスの解釈では若枝は懲罰と結びついているが、それは「若枝」の原語である ῥάβδος の意味に関わる。ῥάβδος は主として「(細長い) 棒、さお、杖」を意味し、「新芽、若枝」の意味ではあまり用いられない<sup>(15)</sup>。七十人訳において、この語はヘブル語聖書本文の ḥōṭēr 「枝、若枝、(細い) 棒、杖」の訳語である<sup>(16)</sup>。オリゲネスは ῥάβδος を懲罰と関連づけていることから、「棒、杖」の意味を第一に考えていることになる。

次はラテン教父の例である。ポワティエのヒラリウスは「キリストは若枝でもあり花でもある」と述べた後、「若枝」を詩編 44: 7 「あなたの王位の笏 (uirga) は公平の笏」と関連づける<sup>(17)</sup>。一方、テルトゥリアヌスは以下のように「若枝」をイエスの母マリア、「花」をイエス・キリストと解釈する。

「つまり彼 [イザヤ] はキリストを花の比喩で、エッセイの根から出て来た若枝—すなわち、エッセイの子ダビデの家系の処女—から上に伸びてくるであろう者…として示している」(『マルキオン反駁』5. 8. 4)<sup>(18)</sup>

七十人訳の ῥάβδος は古ラテン語訳で uirga と訳され、それはウルガタに引き

継がれた。uirgaは「(細長い) 枝, 若枝」が原義で, 次いで「(細い) 棒, 杖」の意味をもつ<sup>(19)</sup>。「若枝」をマリアとみなす解釈はテルトゥリアヌスが初めて行ったのか定かでないが, 現存する文献では彼の著作に最初に現れる。マリアがuirgo「処女, おとめ」であったということから, uirga「若枝」がuirgoに関連づけられ, 若枝はマリアの比喩という解釈が生まれたのである。上記の引用文ではuirga (uirgaの奪格形) がすぐ後でuirgine (uirgoの奪格形) と言い換えられている<sup>(20)</sup>。2語が結びつけられた根拠はテルトゥリアヌスでは示されていないが, 一つは音の類似, もう一つはuirgoの語源と推測されよう。この2語の関係については, 偽アウグスティヌスの『説教』に次のような記述がある。

「というのは, われわれはこの名詞の語源を論じよう。uirgoはいわばuirgaであり, uirgaからuirgoが出ているのである。そして今や彼らはそれらの語が互いに合致することを理解すべきだ。なぜなら, たった一文字の違いで, uirgaの音の響きがuirgoの音の響きであるように思われるのだから」(『説教』7.24 (27a))<sup>(21)</sup>

現代でもuirgoはuirgaにおそらく由来すると推定されている<sup>(22)</sup>。

テルトゥリアヌスがイザヤ11:1をキリストについてのみならず, マリアについての預言でもあると解したのは, イエスがマリアを通してダビデの家系に属することを示すためであったと思われる。上の引用文で, マリアは「エッサイの子ダビデの家系の処女」と表現されている。『マルキオン反駁』3.17.3-4では若枝の「花」はキリストで, 彼は「マリアを通して (per Mariam)」エッサイの家系に属すると記されている。同書4.1.8では「マリアの家系に従って (secundum Mariae censum)」, また同書4.36.11-12では「処女の家系を通して (per uirginis censum)」キリストはダビデの家系に属すると述べられているが, どちらの記述もイザヤ11:1が示唆される文脈に置かれている。また, 『キリストの肉について』21.5-7では「若枝」がマリア, 「花」がキリストと述べられた後, 「キリストの肉はマリアにだけではなく, マリアを通してダビデにも, またダビデを通してエッサイにも結びつく」と記されている<sup>(23)</sup>。

このようにテルトゥリアヌスにおいては, マリアはイザヤ11:1と関連のある

文脈では、イエスの家系を明示する目的で言及されるのである。マタイ福音書1章とルカ福音書3章のイエスの系図では、血のつながりのない父ヨセフはダビデの一族であるが、実母マリアについては不明である。若枝をマリアとみなすことができれば、彼女はダビデの父であるエッサイの一族出身となる。その若枝から咲く花をイエスとみなすことで、イエスがダビデの子孫であることを示そうというのが、テルトゥリアヌスがこの比喩を用いる狙いであっただろう。

### 3. マリアの処女性の称賛

「若枝」はマリア、「花」はキリストという解釈は、次いでアンブロシウスとヒエロニムスに引き継がれる。テルトゥリアヌスは若枝についてはごく簡潔に、それがマリアを指すことを述べるのみだが、アンブロシウスとヒエロニムスはより詳しく記述する。以下はアンブロシウスの『処女の教育について』の一節である。

「処女性は根から出て来る若枝でもある。というのも、このように書かれているからだ。『エッサイの根から若枝が出て来るであろう。そして彼の根から花が上に伸びるであろう』[イザヤ 11:1]。この若枝は空洞ではなく、中味が充実している。それゆえ、あなたがあなたの花を守るよう、誰もあなたの若枝を焼くべきではない。あなたは若枝だ、おお処女よ。あなたの上で父祖の根に属する花が上に伸びていくよう、あなたは地面の方へ曲げられたり、たわめられたりしてはならない。」(『処女の教育について』 9.59)<sup>(24)</sup>

次はヒエロニムスの『書簡 22』からの一節である。

「『エッサイの根から若枝が出て来るであろう。そして花がその根から上に伸びるであろう』[イザヤ 11:1]。若枝は主の母であり、単一で純粹、混じりけがなく、外から1つの若芽も固着せずに、神に似てただ一人のみで子を生む力をもつ。若枝の花はキリストであり、こう語っている。『私は野の花、谷間の百合』[雅歌 2:1]」(『書簡』 22.19)<sup>(25)</sup>

以上の二箇所は、禁欲主義を実践し処女性を守ることを志す女性たちのために書かれている。そして「若枝」をマリアとみなす解釈は、そのような女性たちにとって最高の模範であるマリアの処女性を称揚する文脈で行われている。この解釈は、上述のようにテルトゥリアヌスでは、イエスがダビデの末裔であることを示すためにあった。だが、アンブロシウスとヒエロニムスでは、マリアの処女性自体を称賛するための拠り所ともなっているのである。

マリアについての比喩はラテン語でのみ成立し得たものであるから、ギリシア語を使用する教会には見られなかった<sup>(26)</sup>。イザヤ 11:1 の古ラテン語訳は七十人訳を忠実に翻訳したものではあったが、そこに読み取られた解釈は、テルトゥリアヌスやアンブロシウス、またヒエロニムスらのラテン教父とギリシア教父とでは大きな相違があったのである。「花」はユスティノス以来、ギリシア教父でもラテン教父でも一貫してイエス・キリストの比喩と解され、強固な伝統となっていた。しかし、ギリシア教父では「若枝」もイエス・キリストの比喩とされたのに対し、ラテン教父ではテルトゥリアヌス以来、マリアの比喩という解釈が行われた。マリア崇拜がますます高まっていた4世紀末に、アンブロシウスとヒエロニムスはこの解釈に基づき、マリアの処女性を称揚した。イザヤ 11:1 のヒエロニムスの翻訳に影響を与えた教会の伝統とは、ギリシア教父からの伝統に加えてラテン教父のもとで新たに成立した、このような伝統であったのである。

#### 註

- (1) Kelly, J. N. D., *Jerome: His Life, Writings, and Controversies*, London: Duckworth, 1975, p. 161 を参照のこと。
- (2) ヘブル語はラテン文字で転写してある。本稿において、文献の邦訳は特に断らないかぎり筆者の私訳である。また、訳文中の [ ] は文意の補いや語句の説明のため、または引用箇所を示すために付加したものである。
- (3) ウルガタの本文は、*Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*, edd. R. Weber, R. Gryson, et al., Fifth Edition, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007 による。
- (4) 古ラテン語訳の本文は以下による。*Vetus latina: die Reste der altlateinischen Bibel*, 12/1, *Esaias 1-39*, ed. R. Gryson, Freiburg: Verlag Herder, 1987-1993。本稿で示した読みはヨーロッパ型本文のもの。アフリカ型・ヨーロッパ型のどちらとも言えない古い本文、およびアフリカ型本文では、若干異なった読みだが、語義にほとんど相違はない。なお、古ラテン語訳の邦訳は、ウルガタのそれと同じ

である。

- (5) 七十人訳の本文は以下による。 *Septuaginta, Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*, ed. A. Rahlfs, Editio altera quam recognovit et emendavit R. Hanhart, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006.
- (6) ヘブル語聖書の本文は以下による。 *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, edd. A. Alt, O. Eissfeldt, P. Kahle, R. Kittel, K. Elliger, and W. Rudolph, Editio Quinta Emendata, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1997.
- (7) 『旧約聖書 III 預言書』, 旧約聖書翻訳委員会, 岩波書店, 2005 年より。
- (8) Kedar, B., "The Latin Translations," in Mulder, M. J. (ed.), *Mikra: Text, Translation, Reading and Interpretation of the Hebrew Bible in Ancient Judaism and Early Christianity*, Assen / Maastricht: Van Gorcum, and Philadelphia: Fortress Press, 1988, p. 323. 彼はイザヤ 11 : 1-3a 全体をその例として挙げている。
- (9) 古い本文では *prodibit*, アフリカ型本文では *exibit*.
- (10) Löfstedt, E., *Syntactica: Studien und Beiträge zur historischen Syntax des Lateins*, II, Lund: C. W. K. Greerup, 1933, pp. 41, 59 を参照。 *exeo* と *egredior* の他の活用形の頻度はたとえば, *exit* 2 回, *egreditur* 31 回 ; *exies* 2 回, *egredieris* 12 回 ; *exeunt* 7 回, *egrediuntur* 10 回。 また, *egredior* は *ex* と *gradior* の合成語だが, *gradior* は単に「進む, 歩く」を意味するのではなく, *OLD* に「特に堂々とした, または悠々とした態度で」という付記がある。従って, *exeo* よりも *egredior* の方がより意味の強い語と言える。
- (11) 前者は *Dialogus cum Tryphone Judaeo* 86. 4, 後者は *Apologia* 32. 12-13.
- (12) エイレナイオスの *The Demonstration of the Apostolic Preaching* 59 (花は「キリストの肉」と述べられている) ; ニュッサのグレゴリオスの *Homiliae in Canticum Canticorum* 5 (*Gregorii Nysseni opera*, H. Langerbeck (ed.), vol. 6, Leiden: Brill, 1960, p. 154)。なお, ユスティノスの *Dialogus cum Tryphone Judaeo* 87. 2 ではイザヤ 11 : 1-3a 全体が, またエイレナイオスの *Adversus haereses* 3. 9. 3 ではイザヤ 11 : 1-4a 全体が, またニュッサのグレゴリオスの同書の序 (*ibid.*, p. 11) ではイザヤ 11 : 1 全体が, 各々キリストについての預言とみなされている。
- (13) 前者は *Commentarii in Johannem* 1. 23. 147, 後者は *Homiliae in Jeremiam* 2. 3.
- (14) *Selecta in Ezechielem (fragmenta e catenis)* 7, 10 (*PG* 13, 792): "διὰ μὲν τῆς ῥάβδου τοῦ σωτηρίου λόγου τὸ ἐπιπληκτικὸν καὶ κολαστικὸν τῶν ἀκούοντων, ὅτε ἐλέγχονται διὰ δὲ τοῦ ἄνθους τὸ ἀποτέλεσμα τοῦ ἐλέγχου καὶ τῆς ἐπιπλήξεως". また, *Translatio homiliarum in visiones Isaiae*, homilia tertia, De septem mulieribus. Cap. XI, 1 (*PL* 24, 910), および *Translatio homiliarum in Jeremiam et Ezechielem*, homilia decima tertia (*PL* 25, 686) にも若枝と花への同様の言及がある。
- (15) Liddell & Scott, p. 1562. 最初に示される語義の「(細長い) 棒, さお, 杖」にはホ



メーロス以降多数の用例があり、10に細別された語義の第5は「職杖、笏」、第7は「懲罰のための棒・杖」である。続いてIIで示される語義の「(ある種の木の)新芽、若枝」では用例はわずか2例である。

- (16) *BDB* (p. 310) ではこの順に語義が示される。この語はヘブル語聖書では他に箴言 14:3でのみ出て来る。
- (17) *Tractatus super psalmos 2, 37* (*PL* 9, 283).
- (18) *Adversus Marcionem* 5.8.4 (*PL* 2, 489, *CCSL* 1, p. 686): “Christum enim in floris figura ostendit oriturum ex uirga profecta de radice Jesse, id est uirgine generis David filii Jesse...” 引用文の直前にイザヤ 11:1-3aが引用されている。
- (19) *Walde-Hoffmann*, Vol. II, p. 797における *uirga* の語義は「細枝、小枝、(細長い)枝」。Ernout et Meillet, p. 739では、「しなやかで曲がりやすい枝」から「さお、細棒、杖」の語義が生じたとされる。どちらの語義に関しても *OLD*, p. 2282では、用例はプラウトゥス以降、多数挙げられている。
- (20) 彼の真正の著作かどうか議論はあるが、*Adversus Iudaeos* 9.26 (*PL* 2, 623, *CCSL* 2, pp. 1372-73) でも2語の密接な関係が示唆されている:「上述のように、ダビデの家系から処女—彼女からキリストは生まれねばならなかった—は子孫を引き出すべきであったことを、明らかに預言者イザヤは以下で語っている。彼が言うには、『そしてエッサイの根から若枝が』、すなわちマリアが、『生まれるであろう。そして彼の根から花が上に伸びるであろう。…』と」(“quoniam ex semine David genus trahere deberet virgo ex qua nasci oportuit Christum, ut supra memoravimus, evidenter Esaias propheta in sequentibus dicit: *Et nascetur*, inquit, *virga de radice Jesse*, quod est Maria, *et flos de radice ejus adscendet*...”). 預言内容の説明で *uirgo* の語が用いられた後、*uirga* の語のある預言自体が引用されている。イザヤからの引用は3a節まで続くが後略してある。
- (21) *Sermons Caillau I* (= A. B. Caillau and B. Saint-Yves (ed.), *S. Aurelii Augustini Hippon. episc. operum supplementum*, t. I, Paris, 1836), 7, 24 (27a): “si quidem ethymologiam huius nominis retractemus, uirgo quasi uirga, a uirga uirgo, iamque intelligant ipsa sibi conuenire uocabula, cum unius litterae differentia hoc uideatur uirgo sonare quod uirga.” 原文はGryson, *op. cit.*, p. 333の下欄から引用した。この記述後、イザヤ 11:1が引用され、若枝がマリア、花が「主の肉」とあると語られる。
- (22) *Walde-Hoffmann*, Vol. II, p. 799; Ernout et Meillet, p. 739; *Etymological Dictionary of Latin and the other Italic Languages*, M. de Vaan, Leiden and Boston: Brill, 2008, p. 682を参照のこと。
- (23) *De carne Christi* 21.7 (*PL* 2, 788, *CCSL* 2, p. 912): “carnem Christi, non tantum Mariae, sed et David per Mariam, et Jesse per David ... adhaerere.”
- (24) *De institutione virginis* 9.59 (*PL* 16, 321): “Virga quoque a radice uirginitas est,

sic enim scriptum est: *Exiet virga a radice Jesse, et flos a radice ejus ascendet*. Non cavata est haec virga, sed solida. Nemo ergo adurat virgam tuam, ut florem tuum custodias. Virga es, o virgo, non curveris, non inflectaris in terram, ut in te flos paternae radicis ascendat.” この文中の “uirga es, o uirgo” は言葉遊びであると Adkin は指摘する (Adkin, N., *Jerome on Virginitate: A Commentary on the Libellus de Virginitate Servanda (Letter 22)*, Cambridge: Francis Cairns, 2003, pp. 163-64). アンブロシウスは以下でも「若枝」がマリアで「花」がキリストと述べている: *Apologia altera prophetae David* 8, 43; *Expositio Evangelii secundum Lucam* 2, 24; *De Spiritu Sancto* 2, 5, 38; *De benedictionibus patriarcharum* 4, 19. これらでは特にマリアの処女性を称賛することは目的ではない。なお、最初に挙げた *Apol. altera Dav.* と同一の文章が *Commentarius in Cantica canticorum* 2,50 にある。

- (25) *Epistulae* 22. 19 (*PL* 22,406; *Saint Jérôme: Correspondance*, tome I, *Lettres I-XXII*, texte établi et traduit par J. Labourt, 3<sup>me</sup> tirage (1<sup>me</sup> éd. 1949), Paris: Les Belles Lettres, 2002, p. 129): “*Exiet uirga de radice Iesse et flos de radice ascendet*. Virga Mater est Domini, simplex, pura, sinceris, nullo extrinsecus germine cohaerente et ad similitudinem Dei unione foecunda. Virgae flos Christus est dicens: *ego flos campi et lilium conuallium*.” この書簡は、イザヤ書を翻訳する 8 年ほど前の 384 年に書かれた (Adkin, *op. cit.*, p. 1 を参照のこと)。若枝と花の解釈は『イザヤ書註解』4.11.1 でも述べられている: 「エッサイの根から出る若枝と花は主自身のことだとユダヤ人は解釈する。つまり、若枝には統治者の権力が、花にはその美しさが示されているからという理由で。だが、われわれはエッサイの根から出る若枝は処女である聖マリアだと理解しよう。その若枝は自らに固着する枝をまったく持たなかった。彼女についてわれわれは上でも読んだ。『見よ、処女が身ごもって息子を産むであろう』[イザヤ 7: 14]。そして花は救い主である主 [だと理解しよう]。彼は雅歌で語っている。『私は野の花で谷間の百合』[雅歌 2: 1] (*Commentariorum in Esaiam Libri I-XI*, 4, xi, 1/3 (*PL* 24, 144, *CCSL* 73, p. 147): “Virgam et florem de radice Iesse, ipsum Dominum Iudaei interpretantur, quod scilicet in uirga regnantis potentia, in flore pulchritudo monstretur. Nos autem uirgam de radice Iesse sanctam Mariam uirginem intellegamus, quae nullum habuit sibi fruticem cohaerentem: de qua et supra legimus: *Ecce uirgo concipiet et pariet filium*. Et florem Dominum Salvatorem, qui dicit in Cantico canticorum: *Ego flos campi et lilium conuallium*”). 「自らに固着する枝をまったく持たなかった」は、本文で引用した『書簡』22 の「外から一つの若芽も固着せずに」と同じ趣旨で、実をならせるのに必要な、いわば雄の枝を持たなかったの意味である。なお、イザヤ 7: 14 への註解でヒエロニムスはヘブル語の原語を巡って文献学的な検討を行い、uirgo と訳す根拠をある程度詳述しているのに対し、

イザヤ 11:1 への註解では uirga を uirgo の比喩とみなす解釈について、上の引用から分かるように、まったく論じていない。ユダヤ人の解釈とは異なる「われわれ」（ローマ人）の解釈を単に示しているだけである。この比喩はラテン語で読む限りにおいて成立するため、ラテン語を使用するキリスト教会内では重要であっても、学問的には論じようがなかったからであろう。『イザヤ書註解』は 408-410 年に執筆されたと推定されているので、この主張は彼がイザヤ書を翻訳してから十数年後のものである（註解の年代について Kelly, *op. cit.*, p. 299 を参照のこと）。

- (26) ギリシア教父であるエルサレムのクリュシッポス（405 年頃 -479 年）はマリアを「エッサイの常緑の若枝」（τὴν ἀειθαλῆ ράβδον Ἰεσσαί）と呼んでいる（*Chrysippi Hierosolymorum presbyteri oratio in sanctam Mariam dei param*, ed. M. Jugie, in *Patrologia Orientalis* 19 (1926), p. 336. 同様の表現が 4 節（p. 342）にもある）。クリュシッポスが活躍した時代を考えると、これはラテン教父からの影響と推測されよう。

略号（著作の詳しい情報は参考文献にある）

BDB	<i>The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon</i>
CCSL	<i>Corpus Christianorum, Series Latina</i>
Ernout et Meillet	<i>Dictionnaire étymologique de la langue latine</i> , ed. A. Ernout, et A. Meillet
Liddell & Scott	<i>A Greek-English Lexicon</i> , ed. H. G. Liddell and R. Scott
OLD	<i>Oxford Latin Dictionary</i>
PG	<i>Patrologiae cursus completus (series Graeca)</i>
PL	<i>Patrologia Latina</i>
Walde-Hoffmann	<i>Lateinisches etymologisches Wörterbuch</i> , ed. A. Walde und J. B. Hoffmann

#### 参考文献

##### 一次資料

- Biblia Hebraica Stuttgartensia*, edd. A. Alt, O. Eissfeldt, P. Kahle, R. Kittel, K. Elliger, and W. Rudolph, Editio Quinta Emendata, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1997.
- Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*, edd. R. Weber, R. Gryson, et al., Fifth Edition, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007.
- Chrysippi Hierosolymorum presbyteri oratio in sanctam Mariam dei param*, ed. M. Jugie, in *Patrologia Orientalis* 19 (1926), pp. 336-43.

- Corpus Christianorum, Series Latina*, Turnholti: Typographi Brepols Editores pontificii.
- Gregorii Nysseni opera*, H. Langerbeck (ed.), vol.6, Leiden: Brill, 1960.
- Patrologia Latina* Database, after J. P. Migne.
- Patrologiae cursus completus (series Graeca)*, J.-P. Migne, Turnholti: Typographi Brepols Editores pontificii, 1857-1866.
- S. Aurelii Augustini Hippon. episc. operum supplementum*, t. I, A. B. Caillau and B. Saint-Yves (ed.), Paris, 1836.
- Saint Jérôme: Correspondance, tome I, Lettres I-XXII*, texte établi et traduit par J. Labourt, 3<sup>me</sup> tirage (1<sup>me</sup> ed. 1949), Paris: Les Belles Lettres, 2002.
- Septuaginta, Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*, ed. A. Rahlfs, Editio altera quam recognovit et emendavit R. Hanhart, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006.
- Vetus latina: die Reste der attlateinischen Bibel*, 12/1, *Esaias 1-39*, ed. R. Gryson, Freiburg: Verlag Herder, 1987-1993.

#### 聖書の訳

『旧約聖書 III 預言書』, 旧約聖書翻訳委員会, 岩波書店, 2005年。(イザヤ書は関根清三訳)

#### 辞書類

- A Greek-English Lexicon*, Compiled by H. G. Liddell and R. Scott, New Edition (Ninth Edition), Revised by H. Stuart Jones and R. McKenzie, Oxford: Clarendon Press, 1968.
- Dictionnaire étymologique de la langue latine*, A. Ernout, et A. Meillet, Retirage de 4<sup>me</sup> édition, augmentée d'additions et de corrections par J. André, Paris: Klincksieck, 2001.
- Etymological Dictionary of Latin and the other Italic Languages*, M. de Vaan, Leiden and Boston: Brill, 2008.
- Lateinisches etymologisches Wörterbuch*, A. Walde, 3., neubearbeitete Auflage von J. B. Hoffmann, Vol. I-II, Heidelberg: Carl Winter, 1954.
- Oxford Latin Dictionary*, Edited by P. G. W. Glare, Second Edition, Vol. I-II, Oxford: Oxford University Press, 2012.
- The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon, With an Appendix containing the Biblical Aramic*, F. Brown, S. R. Driver, and C. A. Briggs, Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, Fifth Printing, 2000, Reprinted from the 1906 edition originally published by Houghton, Mifflin and Company, Boston.

二次資料

Adkin, N., *Jerome on Virginity: A Commentary on the Libellus de Virginitate Servanda (Letter 22)*, ARCA 42, Cambridge, Francis Cairns, 2003.

Kedar, B., "The Latin Translations," in Mulder, M. J. (ed.), *Mikra: Text, Translation, Reading and Interpretation of the Hebrew Bible in Ancient Judaism and Early Christianity*, Compendia Rerum Iudaicarum ad Novum Testamentum, Section Two, The Literature of the Jewish People in the Period of the Second Temple and the Talmud, Assen / Maastricht: Van Gorcum, and Philadelphia: Fortress Press, 1988, pp. 299-338.

Kelly, J. N. D., *Jerome: His Life, Writings, and Controversies*, London: Duckworth, 1975.

Löfstedt, E., *Syntactica: Studien und Beiträge zur historischen Syntax des Lateins*, II, Lund: C. W. K. Greerup, 1933.

参考 URL (聖書箇所を検索)

The ARTFL Project: Multilingual Bibles; Latin Vulgate

<https://www.lib.uchicago.edu/efts/ARTFL/public/bibles/vulgate.search.html>